アフガニスタンより女性教育者二〇人来学

―二月三日より三月七日までの研修が無事終了―

五女子大学コンソーシアム連絡協議会　座長　箕浦　康子

アフガニスタンより、教員養成系の二つの大学の女性教官一〇人と女性校長一〇人が研修のため来日しました。二月四日には本学理学部会議室で本田学長をお迎えして開講式を行い、小憩の後、本学の舘かおる教授による講義「近代日本女子教育史からの提言―アフガニスタンの女子教育復興プラン策定にむけて」がありました。

文部科学省の河村副大臣を訪問した研修員一行

昨年八月にはコンソーシアムの関係者八人がカブールに出向き学校現場や教員養成大学などを視察し、十一月には教育大学学長やアフガニスタン教育省の局長などを日本に招き、当研修の準備をしてきました。女性教育者リーダーグループ育成のための今回の研修では、各大学が三ないし四日の研修を引き受けていますが、本学のプログラムは次の通りでした。

二月十・十二日は、日本女子大学で幼稚園、小学校での研修を希望する一〇人と本学で理科教育の講義・実習を希望する一〇人に分かれました。十日は、室伏理学部長による「自然系分野における女性の研究・技術者養成」、石井朋子附属高等学校教諭、佐藤道幸附属中学校教諭による「理科教員養成のカリキュラム、理科教育法、教育実習」についての講義、藤枝修子アフガン特任教授による理科実験の基礎である「量る・測る」ことについて実習しました。二月十二日の午前中は藤枝特任教授の指導で、二人一組で「時計反応」の実験を行い、午後は教材作製実習で、ペットボトルを使って実験器具をつくり、塩水振動子の実験をやりました。十七、十八、十九日は、東京女子大学の担当でコンピュータ初歩の講習会、二十日には、また全員がお茶大に集い、午前中は学校運営・年間行事計画などの校長業務について附属学校校長や副校長らと懇談後、理科グループと家庭科グループに分れ、授業参観やチームティーチングのための教案をつくる実習をしました。二十一日は、理科の授業で教壇に立ったり、アフガニスタンにはない家庭科教育のコンセプトや職業教育・保健衛生・栄養学との連携について学び、午後には、前日の教案に基づき本学附属中学生に対しアフガン料理を教えてもらいました。その後、アフガン料理の試食会、畑江研究室手作りの日本料理や中華料理を研修員に味わってもらうこともかねて、お茶大での研修に関わった関係者も交えてさよならパーティーを開きました。

中学生アフガン料理を習う

研修員は、二月二十二日から二十七日までは奈良へ行き、世界遺産を見学したり山村の小学校を訪ねたり、奈良女子大学附属小中学校で総合学習についての研修をうけました。

今回は、研修補助インターンの学生二人を各研修に張りつけ、翌朝十時までに研修の様子をwebにアップし、関係者が相互に他所での研修を参照できるようにしました。これは、カブールの留守宅の家族が日本での様子をJICA事務所に聞きに来たときに元気に研修を受けている本人の姿をパソコン上で確認させられるという思わぬ利用がありました。また、桜蔭会や附属学校園の保護者会の協力を得て、二月十五日（土）には家庭訪問の機会を持ちました。通訳なしでしたが、研修員には日本の家庭の様子がわかり非常に好評でした。本研修の最終報告書は四月中には発行される予定ですので、ご入用の方は、研究協力室までお申しお越しください。

アフガニスタン指導的女子教育者の様子

アフガニスタン担当特任教授　藤枝　修子

二月三日から三月七日までの五週間にわたる研修期間のうち、東京女子大主催の情報教育で、ダリー語の文書作成を含むコンピュータ実習が行われた三日間を除き、全期間を来日研修員に同行する機会を得ました。ここでは、この間に感じた様子を述べたいと思います。

まず、服装は校長と大学教員とに違いが見られました。校長は全員いつも黒の洋服と白または灰色のスカーフを着用していましたが、大学教員はいろいろな色で、がら物の洋

カフェテリアの説明に聞き入る一行

お琴の演奏を体験(於・奈良新公会堂)

服と模様のあるスカーフをまとっておられました。ラメ入りの美しいロングドレスやブランドものの、ハンドバック、つけ爪など関係する私たちよりずっとおしゃれな雰囲気を不思議に思い、詳細を聞いてみました。ラメ入りの洋服は生地を買って仕立て屋でサイズに合わせてつくったとのことで、既製品より安く、一ヶ月の給料相当の三〇ドルだったとか。

年齢構成も校長グループは年配が多く、平均年齢は四五・一歳に対し、教員養成カレッジ（ＴＴＣ）教員は三一・八歳、教育大学は三八・八歳でした。学歴についての不謹慎な比較が許されるとすれば、校長は大卒四名、ＴＴＣ卒三名、高校卒三名に対し、ＴＴＣと教育大学は全員大卒、修士修了者四名、ＰｈＤ一名であり、特に教育大学教員はソ連などの外国の大学院修了生が三名おられました。この二〇名の方々は今回の研修ではじめて知合いになった人たちもかなりあるとのことで、年齢、立場などの微妙なものが原因と思われる場面も多々ありました。私は言葉が通じないので、通訳やコーディネーターからの情報しかありませんが、表情や態度からは察することができました。質疑応答や意見交換の場では、大学関係者からはいつも活発に発言されましたが、校長グループからは決まった方からの発言が多かったように感じました。ただ、女性の立場などを議論する場では全員が活発に意見を述べられました。当然ながら、校長グループは常に自分の学校の代表としての意識があり、四名が８㎜ビデオを来日直後に購入し、帰国後自分の学校で紹介しようとのアイディアで、いろいろな場面の撮影を実行していました。今回のような来日研修に求める目的が、校長と大学教員とはかなり違いがありました。今後の研修に対する希望として、今回のように広い分野がよいという意見と、専門分野ごとの研修を少人数で、もっと深く掘り下げて欲しいという意見があり、大学教員には後者の希望が多数をしめ、留学生の受け入れを希望する声もありました。しかし、共通点は、コンピュータの実習が有意義であったこと、日本が空襲などで壊滅した状況や戦後立ち直った経緯を詳細に知りたいとの希望が強かったことでした。研修員の皆さんは、今後のアフガニスタン女子教育のリハビリテーションへの役割を実感しながら、物心ともにいろいろなお土産を携えて帰国されました。私たちも、大勢の方々のご協力により一年目の成果としてそれなりの手ごたえが得られました。この紙面をお借りして、ご支援下さった方々に深謝します。

奈良の100円ショップで買ったお土産と静岡県総合教育センターで貰った文房具を持って東京行き新幹線こだまを待つ一行（掛川駅にて）

養護学校生徒が作った小作品を見て感激ひとしおの一行（筑波大学附属桐が丘養護学校にて）

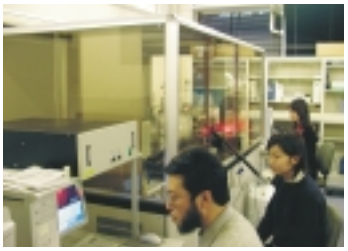
研究室紹介

理学部物理学科ソフトマター構造研究室

理学部　今井 正幸　教授

ソフトマターって何？

物理と聞いて皆さんはどのようなイメージを持ちますか？今まで物理学は自然界の現象を、そのエッセンスだけを残して単純化していき、その根本的な原理を明らかにするという手法（還元論）により様々な可能性を人類に示してきました。そのような物理学の流れのなかで、最近は、今までに得た物理学の知識を利用して、我々の身近にある多様で複雑な現象を明らかにしようとする新しい流れが生まれてきました。一つの例を考えてみましょう。私たちの身の回りは様々なモノで満ちあふれていますが、そのようなモノが硬いモノから柔らかいモノへと変化してきている気がしませんか？例えば今まで金属やセラミックス（陶磁器など）が使われていた容器が高分子（プラスチック等）になったり、テレビがブラウン管から液晶になったりしています。これら、高分子・液晶・界面活性剤（石鹸）などの柔らかい物質をまとめてソフトマターと呼びます。このソフトマターが活躍するのは単に工業製品だけではありません。化粧品、食


実験中におじゃましました、奥のガラスケース内の装置は小角Ｘ線散乱装置